

小説

蜘蛛の囀と

稲瀬 隆

その日、女は一匹の雌蜘蛛だった。何故ということもない。たつた今、自分が蜘蛛だと自覚したのだ。理由はわからない。今より前は蜘蛛でなかったのか。かつて自分は何だったのか。そんなそら恐ろしい考えは、本能が消去した理屈はどうあれ、蟲は蟲の、禽は禽の、魚は魚の生涯を生きるしかない。譬えそれが数日であれ、数年であれ、百年余であつても、あらゆる生き物、およそ生あるものはすべてその運命に従い、生ある限り、生きていく今を生きるしかないのだ。

蜘蛛がしがみついていたのは縦目張りの檜の壁板。そこは二間四方ほどの湯殿だった。男がひとり、丸い大きな檜

の湯桶の中、温泉吐口と向かいのへりに頭をもたせ、身を沈めている。手拭いをのせた頭髮には少し白いものが混じってはいるが、体躯には十分力が詰まって見えた。男好きする女、とはいふものの、女好きな男では意味が違う。だがこの男の場合は両方だ。女が惚れがちな男で、かつ女癖もよろしくない。当夜も一刻程前、女を哭かせていた。誘い込み、拒む相手に酒を強い、嫌がるどころ組み伏せて、力任せに欲望を果たした。その後のことは覚えていない。気づけば女は居らず、柱時計は二時をまわったところ。酒のよどみと情事の汗が心地悪い。二度寝する前にひと風呂を、とやつてきた。

蜘蛛にとつてそんなことは、どうでもよい。わが身の数万倍もある物体は、餌でもなければ天敵でもない、樹や岩同様、ただ背景の一部に過ぎず、崩れ落ちてでもこぬ限り、恐れる理由はない。只々、己が身の丈に合う獲物を探しつつ、湯桶からの湯気で困らぬ場所に張り付いている。かたやの男もまだ蜘蛛に気づいてはいない。

この湯場は小さな温泉宿の内湯で、戦後再興した都心近くの温泉街にあつた。戦時下には駅名から温泉の二文字が外されたものの、箱根、熱海に比してはるかに近いため、朝鮮戦争からこつち、今また首都の『奥座敷』として賑わっている。何軒かの置屋もあれば、隠れた賭場も二、三あつて、結構な繁盛ぶりだ。湯中の男はこの宿の常連で、抱いた女は女衞まがいの顔なじみが送ってきた。さしずめ千円札でもちらつかせ、酌だけで良いとか、なかば騙してよこしたのだろう。悪いようにはしないと笑いかけて心を解き、金は払つてあるからとすごんで組み伏せた。ほんの一片の呵責さえも加虐の欲が呑み込み、性的快感だけが身体を支配した。局部から脳髓に直結した痺れのような快感は良心の意識を麻痺させて深い陶酔の中に落ちた。

今ひとり湯の中に居ると、まどわりついていたものが溶け、意識の中の濁つたものが少しづつ晴れてくる。すると

再び先ほどの露わな情景が鮮明に浮かんできた。かすかに生臭い温泉の湯気は女の吐息を、敏感な皮膚が感じる湯熱は火照つた人肌と女体に差し入れた半身の熱を呼び覚ました。全身が快樂を反芻し、末梢から脳髓に至るほどの身熱で、淫靡な愉悅が蘇つた。

その時、蜘蛛は頭の左側、二つの側眼がなにか動くものを捉えた。松の実ほどの茶色い小さなゴキブリが、動いては止まり、止まつては動き、触角を振りながら視野をよぎろうとしている。蜘蛛はほんの僅か、小さく飛び上がつて素早く体の向きを変え、獲物を正面の大きな両目で捉えて距離を測る。ゴキブリが動きを止めた刹那、蜘蛛はおのれの二十倍ほどの距離を跳び、四本の脚でしっかり獲物を捕らえた。

男は視界の端でなにか小さな黒っぽい点がツンと動いたのに気づいた。目を凝らすと淡い湯気の向こうに小さな蜘蛛が見える。己の身の丈ほどの獲物にしがみつ き、少々手こずつたようにチョンチョン動いていた。そのさまは、今にもゴキブリ共々湯に落ちそうに見えた。

こいつらとの共湯はいただけない。顔をしかめた男の脳裏には、ふとある言葉が浮かんだ。

『朝蜘蛛は吉兆、喩え仇でも殺すべからず。夜蜘蛛は凶

兆、喩え親でも殺すべし。』

蜘蛛が親とはどういう仕掛けだ。何の因縁でそうなるのだろうか。思わず苦笑いが浮かぶ。男は片目で蜘蛛をにらみながらそろり半身を反らせて手桶を掴み、湯口からの熱い湯をその七、八分に貯めて、ザッと一気に虫どもに浴びせかけた。熱湯に包まれた蜘蛛は熱さに身を縮める間もなく、獲物とともに鉄平石の洗い場に叩き落され、排水口へと流されていった。

これでヤツもお陀仏だな。男はその流される様を目で追いい、満足し、肩まで湯に沈む。ふと輪廻という一語を思い出して束の間、柄にもなく殺生について考えた。

これは親切の殺生というものだ。この世の命が輪廻転生で廻るなら、どの蜘蛛だって永世、蜘蛛のままありたいとは思ってはいまい。一時も早く次の世に送り出し、頂点たる人まで上り来るのを手助けする。これが情というものだ。引いた花札が白黒坊主や鬼札でも、捨てるからこそ次札を引いて勝負ができる。それと同じだ。

ふっと小さく息を吐いてから深く呼吸をし、再び目を閉じて温泉の湯熱と香に身をゆだね、妄想に落ちた。

流された蜘蛛は一瞬、熱の衝撃を受けた後、叩き落された石の上で冷やされ、流され、幸いにも排水口を覆う竹の

編み籠に取つくことができた。だが五感のうちで最も優れていたはずの視覚は、だいぶ損なわれた。先ほどまで獲物の触角の動きさえ見逃さなかった眼が、今はすべてがおぼろげで、遠近の判断さえ怪しくなっている。

ここに留まって死を待つわけにはいかない。湯が引いた頃合いをみて、そろりそろり動き出す。体の熱が徐々に下がると、また力が少し戻ってきた。ここを脱せよ。己を守る身の内からの命に従う。言うほどの動きが一寸たらずの跳躍になり、やがてその跳び幅が二寸、三寸へと回復したころ、蜘蛛は濡れた湯殿から脱出できた。なんとか仕切りの簀の子まで辿り着き、引き戸に取り着いて登り始めた。だがそれも束の間、やおら戸が滑り動いて振り落とされた。そこは脱衣所だった。

湯から上がった男が少しふらつきながら入ってきた。他には誰もいない。絞った手拭いで全身を雑に拭き終えると、洗面台で額を濡らし、コップ一杯の水を飲み干して、湯のぼせた裸体を預けるように深々藤椅子に倒れ込んだ。両手には備えの団扇を掴み、少々大げさに体を扇いだ。動きが大仰なのは、まだ酔いが残っているからだろうか。その様はまるで干潟に出てきた小蟹だ。シオマネキの求愛ダンスだ。

蜘蛛はよじ登った台の端から、その奇態を眺めていた。

距離感を失った視覚では大きな動きだけがおぼろげに見て取れる。それは同種の雄蜘蛛からの求愛に似ていた。だが雄雌を問わず捕まれば喰われるのが蜘蛛の宿命。なるべく己より若く小さい相手を選び、寸時にことを済ませねばならぬ。それゆえ雄に交尾器はなく、瞬時に精子の球を雌の腹の切れ目から差し込む。繁殖期に入った雌は機会ある限り、相手を違えて交接をくり返す。風呂場の雌蜘蛛が男の羽織った浴衣に跳び移ったのは偶然ではない。暫し前、大きな雄蜘蛛に抑え込まれ、子種を挿入されていた。熱い痛みと怒りを知った蜘蛛の女は男の匂いに誘われていった。

男は部屋に戻ると、寝間の卓袱台に残っていた半合ばかりの爛冷ましを一気に飲み干し、布団もろくに掛けずに大の字に寝てしまった。蜘蛛は浴衣の裾から太ももあたりに這いのぼり、禪の隙間から男の生身に入り込んだ。「ここだ」女は思った。こここそが、己が命を込める場所。

その夜、男は夢の中でこれまでに味わったことのない、想像さえできなかった淫悦に浸った。快感が電流のように局部から全身隅々まで神経に沿って走り、脳の髄は快樂物質を絞りきるように痺れ、夢の中の意識さえ薄れた。

翌朝、男は犯した女が入水したことを知った。

男が口から、鼻から、子蜘蛛を嘔き出して絶命したのは、翌年の春だった。